

『狭衣物語』の今姫君の養女性をめぐる

倉 田 実

はじめに

『狭衣物語』には、多様な養子女関係が設定されているが、前稿までに、源氏の宮・女二の宮所生の若宮・飛鳥井の姫君・嵯峨院女一の宮などにおける養子女性を考えてきた⁽¹⁾。本稿では、これらを受けて、洞院の上に迎えられた今姫君における養女性が、物語展開とどのようにかかわっているのかを検討していきたい。また、同じように養女の境遇となる源氏の宮との対照性も併せてみていきたい。本文は、集成本を使用するが、表記は私に換えた。

一 養女となる次第

源氏の宮は、物語始発の時点においてすでに堀川の上の養女であったが、今姫君は、物語が進行してから洞院の上の養女にされている。しかし、物語の始発当初から洞院の上が養女を迎えるだろうことは暗示されていた。源氏の宮が始発部で改めて紹介されたのに続き、洞院の上については、次のように語られていた。

太政大臣の御方(洞院の上)には、いかにかやうの人おはせで、つれづれにおぼさるるままに、「さるべからむ人の御女もがな。

預かりてかしづきたてむ」などの明け暮れ、さるはうらやみたまふめる。
(巻一・20頁)

洞院の上は、子女に恵まれず、源氏の宮のような養女もいないので、所在のない日々であるという。そこで、しかるべき人の娘を「預かりてかしづきたてむ」と思っている。「預かる」とは、ここでは養女として迎える意であり、その養女を育てていきたいのである。男子ではなく、女子を養女にと願うのであり、これも道綱母のように、女子のいない貴族女性の願う生き方の一つであった。日常的な「つれづれ」を、養女養育によって「慰め」ようとするのであり、このことは、後に洞院の上が、今姫君を「迎へとりて、つれづれの慰めにせむ」(巻一・73頁)と語っていたとされるところで明らかである。洞院の上が養女を迎えようとした最大の理由は、「つれづれの慰め」を得るためであり、入内させる目的はなかったのである。

入内のことは、「内裏参りのことなどおぼしりにけり」(巻三・25頁)と巻三にあるように、その時点になって思いつかれたことであった。一部に、入内目的で洞院の上が今姫君を養女にしたとする理解があるが、堀川の上と同じく、縁組の時点ではまだ想到していなかったのである。物語の構想としては、入内騒動に展開する目論見があったとしても、洞院の上自身としては、養女入内は思いだにしないことであつた。

洞院の上が養女を欲した他の理由は、堀川の上や坊門の上の子女養育ぶりが羨ましかったからでもある。この点も、物語当初で暗示されていた。

太政大臣の御方は、なかのこのかみにて、もとかしはにおはすれど、かかるあつかひぐさも持ちたまはねばにや、我が御有様ひとつを、はなやかに今めかしうもてないたまひて、我はと誇りかにおし立ちたる御心掟てにぞおはしける。人よりはいかでと、もて出でたる御物好みなどして、いとわららかに、人にくからぬ御心掟てなるべし。かくさまざまにもてかしづきたまふ御さまどもをぞ、明け暮れうらやましくおぼしたる。(巻一・54〜55頁)

坊門の上には中宮がおり、堀川の上には狭衣と源氏の宮がいて、それぞれ「あつかひぐさ」となっているが、洞院の上にはそれがない。だから、自分自身を華やかに装うことに努めているものの、それでも他の上たちの養育ぶりは、「明け暮れうらやましく」思うとされている。この羨望ぶりや「人よりはいかでと、もて出でたる御物好み」とされる積極性に富んだ性格が提示されることによって、後の養女迎えが必然化されているのである。「洞院の上の設定は今姫君という人物を登場させんが為である」とする見解は、当を得ていよう。

一方の今姫君が洞院の上を迎えられたのは、母が亡くなったことと堀川関白の子と判断されたことに拠っている。堀川関白は自身の落胤であると確信していないが、洞院の上の理解は、夫の子であり、これも大きな理由となる。「しかるべき人の御女」として、この今姫君の境遇に優る者はいないのである。養子女は、これまでも指摘してきたように、両親で迎えるのではなく、養い親となる個人が迎えるものであった。だから、養子女を迎えたとしても、配偶者がいた場合にその養育に協力してくれるかどうかは別問題になる。洞院の上が自身の縁者から養女を迎えることもあり得るが、その場合には、堀川関白の協力があるかどうかは確定できない。堀川関白の子であれば、間違いなく協力はあり得るであろうし、その要請もできる。夫の他の妻に産ま

せた子を養子女にするのは、もっとも安心なのであった。道綱母が養女にしたのも、夫兼家が、源兼忠女に産ませた女子であった。こうした暗黙の判断によって、今姫君は洞院の上の養女とされたのである。

今姫君の存在が洞院の上知られたのは、その母の縁によるが、その経緯は諸本によって異なるがある。今姫君が物語に登場するのは、狭衣と堀川の上との会話で話題にされたことによるが、そこでは次のように噂されていた。堀川の上が語る言葉である。

故後の宮にありける母君の女は、かこつべきゆゑやありけむ、母失せて後いとあはれにてなど聞こえたまひけるを、かの上、「迎へとりて、つれづれの慰めにせむ」となむのたまふとぞありし。

(巻一・73頁)

傍線部が分かりにくいのが、ここは集成本頭注のごとく、「母君は亡き皇后宮にお仕えしていた人でその娘は」の意にならう。この箇所は新全集になると次のようになっている。

いさ、この後の宮にありける伯督の女は、かこつべきゆゑやありけん、母失せて後、いとあはれになんありける、かの上のつれづれの慰みにせん、とて迎へたまふべき、とこそあめりしか。

(新全集巻一・94頁)

また、大系本で、右の傍線部は、次のようになっている。

いざや、かの後の宮にありける伯の君の女は、

(大系巻一・77頁)

今姫君物語は物語全体でわずかな分量を占めるに過ぎないが、諸本によって異同がはなはだしい。改変を誘発させる面白さがあるからであるが、異文の総体を丁寧参照していく余裕はここにはない。

さて、今姫君の母の名は、集成本では不明だが、新全集では「伯督の女」とあるので「伯督の君」となるようであり、はっきりしているのは大系本の「伯の君」になる。また、母が仕えていたのは、集成本では「故後の宮」になり、他本は洞院の上の姉で存命の「一条院後の宮」になる。このあたりを若干整理しておきたい。

『狭衣物語』は伝本によって系図も異なるわけで、この点でも厄介である。まずは今姫君の母が大系本のように「伯の君」と設定される意味を考えなくてはならないが、集成本に拠る本稿の趣旨にかかわらないのでここでは不問に付しておきたい。問題は、その母が仕えたのが、「一条院後の宮」なのか「故後の宮」なのかである。集成本のようにだと、この人物の系譜が問題になるが、付載の系図では一条院・堀川関白・嵯峨院などの父となる「故院」の後の宮になっている。これしか処理の方法がないわけだが、この後の宮は崩御してから何年も経過しているとは考えられないので、母も宮仕を辞してから何年も経過していたことになる。これだと一世代前の人物のようになってしまい、問題であろう。したがって、「故後の宮」とある集成本は、他本によって少なくとも「この後の宮」などの誤写・脱落であろうと想定せざるを得ない。「この後の宮」になれば洞院の上の姉「一条院後の宮」を指示することになり、この方が物語展開からみて素直である。後の今姫君入内騒動にかかわるのが「一条院後の宮」であり、また、今姫君の存在が洞院の上に伝達されるルートとしても当を得ている。

この伝達ルートは、集成本で、「母失せて後いとあはれにてなど聞こえたまひけるを」とあり、母が亡くなった後、今姫君が堀川関白にその窮状を訴え、そのことを洞院の上に伝えたことになるが、この経過は不自然である。堀川関白は落胤かどうか確信を持っていない語りがあり、一方の洞院の上は落胤と判断している。確信の持てない話を伝えられた洞院の上が、それを確信するということは、親子の認知にかかわる場合、想定できないであろう。堀川関白が我が子と確信せず、洞院の上が堀川関白の子と確信することはあり得ないのである。これも、他本のように、堀川関白を介さず、今姫君の母が仕えていた「一条院後の宮」のルートでその妹の洞院の上に伝えられたとした方が妥当であろう。このルートなら、洞院の上が今姫君を堀川関白の子と確信した訳がはっきりする。集成本のこの本文も不自然なのである。

今姫君の母は、「一条院後の宮」に仕えていて亡くなった。堀川関白の落胤であると聞かされていたであろう今姫君は、不如意な生活になったことを、「一条院後の宮」側に訴え、その情報が洞院の上に伝えられたことになる。この背景には女房社会の存在が見えるようであり、飛鳥井の姫君が「一条院後の宮」の一品の宮に引き取られた経緯と照応している。飛鳥井の君の伯母常盤の尼君が、かつて「一条院後の宮」に仕えていた縁によって、飛鳥井の姫君の美しさが一品の宮に知られ、養女とされたのであった。女房と仕える主人とが形成する女房社会のネットワークによって、飛鳥井の姫君や今姫君の存在が知られ、子女のいない女性たちの養女に迎えられていくのである。また、「一条院後の宮」において、今姫君と飛鳥井の姫君の近さが覗われもすることになる。⁽³⁾

以上、今姫君が洞院の上の養女になった次第とその背景を整理したことになる。

二 養女の悲愁

今姫君は、こうして洞院の上の養女となったわけだが、その当初からこの境遇に馴染めないでいる。養女としての悲哀・悲愁が今姫君において語られるようであり、その様相をここでははみていきたい。まず今姫君自身が初めて登場する段である。

まことや、かの太政大臣の御方には、この姫君迎へとりたまひて、西の対の玉をみがけるに、しつらひ据多たまうて見たまふに、あてやかに、さてもありぬべきさまなれば、年ごろの本意か
なひて、はればれともてかしづきたまふさま、世づかぬまで見ゆ。殿の内にも世の人も、「いみじかりける幸ひかな」と賞でけり。

年は二十にぞなりたまひけれど、いたくおほどき過ぎて、あま
りいほけなくものはかなきさまにて、げにおほろけに思ひうしろ

む人のはかばかしきなくは、うしろめたげにぞおはしける。心に思ひあまることありとも、色に出だしたまふべうもあらず、ことのほかにあさましきことなりとも、人だにもてなざば、おのづから忍び過ぐすべくおはするを、よき女のかしづかれたまひたるはかくこそおはすべけれと見ゆるものから、あまり埋もれたまへる気色などは、かくはなばなともてなされたまへる御有様には違ひて、「行末やいかが見なされたまはむ」と心苦しかりける。

またなきものに思ひかしづかれたりし親の御もとにてだに、かくはるけどころなかりし御心ばへの、まいてにはかに母にも後れ、かなしくせし乳母もうちつづき失せにしかば、心のうちにはいとかなしかりけるに、まめやかに思ふ人だに添はで、かく知らぬ所に迎へられて、ありつかず、はればれしくもてなされたまふに、いと我にもあらぬ心地して、ほれ惑ひたまへり。

(巻一・78〜79頁)

養女に迎えられて間もないから、今姫君はこの環境に馴染めないという語り方にはなっていない。右は、迎えられた当初の説明ではあるが、これは一般化された日常的なありさまになっていると把握すべきであろう。

引用部の最初の段落は、主に洞院の上の視点に重ねて語っており、「年ごろの本意かなひて、はればれともてかしづきたまふ」とされるのは、満足げに養育にいそしむ様になる。洞院の上の養育ぶりは、引用部全体で「はればれと」「はなはなと」「はればれしく」などと形容されて語られているが、この一方で、それに馴染めない今姫君の性格や性情を明らかにしている。

今姫君は、点線部「いたくおほどき過ぎ」「いはけなくものはかなきさま」「うしろめたげ」「忍び過ぐす」「埋もれたまへる気色」などと、くどいほどその性格性情が説明され、これらを統合するかのようになり、「はるけどころなかりし御心ばへ」であるとされている。洞院の上とはまったく逆の対照的な性格性情となる。これは、今姫君自身が把握

するところでもあり、対照的であるゆえに落ち着かず、自分の居場所を「知らぬ所」とし、「我にもあらぬ心地」であると感じている。養女に迎えられても、その境遇に馴染めない様が当初から明らかにされているのである。なお、今姫君の「ことのほかにあさましきことなりとも、人だにもてなざば、おのづから忍び過ぐすべくおはするを」とされる我慢をし通す性格は、巻三の入内騒動に耐え、また、母代から密通を難詰されて髪を切ってしまう伏線にもなっている。

養母の洞院の上と性格性情が相違するだけなら、対処の仕方は考えられようが、ここに「母代」が参入されることで事態は收拾されることなく混乱をきたすことになる。右の引用に引き続いて、母代は次のように紹介されている。

失せにし母のなま親族の、高きまじらひして、人数ならで世にありわぶる、さすがにゆゑづきもの見知り顔にて、かたはらいたきもの好みさらずともおほゆる、ありけり。伯母の尼君、かかる人呼びとりて添へたる、げにゆゑゆゑしげにて、母代にしたり。

(巻一・79頁)

今姫君に「失せにし母のなま親族」という縁戚関係になる母代を置いたのは「伯母の尼君」で、洞院の上はその母代をそのまま迎えている。この「伯母の尼君」が飛鳥井の君を看取った「常盤の尼君」と同一人物かどうかは議論の余地があるが、出家する以前に女房として出仕していたことは想定できよう。先に示した女房社会のネットワークを構成していた一員であり、その縁によって同じく「高きまじらひ」(新全集では「高きまじらひはせで」に作る)をしていた「なま親族」の女性を母代にしたことになる。

母代は、傍線部で「ゆゑづきもの見知り顔」「かたはらいたきもの好み」「ゆゑゆゑしげ」などとされる性格であるという。その内実がこの引用以降で暴露されていくが、その実際をみることは割愛したい。ここでは、洞院の上だけでなく、こうした性格の母代が参入されたことによって、今姫君の養女としての悲哀悲愁がさらに醸成されているこ

とを確認しておきたい。

君はただ赤子の襁褓に包まれたる心地して、あるにもあらずまかせられたまへり。しつらひ、有様などのめでたく、同じ我が身もおぼえぬを、人知れぬ心のうちには、「母や乳母などに、これを見せたらましかば、いかで人なみなみにさむと明け暮れ言ひ思ひたりしものを。よしなき人にまかせられて、心に思ふことも言はまほしきこともつましく恥づかしうて、闇に向かひたるやうにおぼゆること」と思ひつづけては、忍びてうち泣きたまひけり。

(巻一・80頁)

新たな環境に馴染めない様は、ここでも「同じ我が身とおぼえぬを」とされておき、先の「我にもあらぬ心地」と同じであるが、「よしなき人にまかせられて」とする思いによってさらに倍化されているとすべきであろう。この「よしなき人」は母代になるが、今姫君にとって、「失せにし母のなま親族」であっても、世話をしてくれる所以もなしい人とは思えないのである。自分が自分でないように感じている今姫君は、母代の無体な面見が添加されたことによって、自己同一性を喪失・崩壊させられているといえよう。養女として置かれた環境が悪かったということになる。

今姫君の養女としての悲哀悲愁は、巻三になっても継続して語られているのであらかじめみておきたい。

もとよりいと言ふかひなきやうにおはせしを、いとど母上におくられたまひて、ほどもなく知らぬ人の御あたりに、ありつかず引き別れて、はなばなともてかしづかれたまふに、我が心の地もせずほれ惑ひたまへるに、この御後見さへ心にまかせて、いとあらあらしう責めおどしきこゆれば、いみじうおぢまさりて、うつし心もなきように月日を添へてなりたまふなめり。(巻三・38頁)

先の引用部から年立では三年の経過があるが、ここで語られていることは、基本的に巻一の段階と違いはない。傍線部の照応の他に、巻一でも使用された自己崩壊的な様を言う「ほれ惑ひ」の語もキーワード

的に使用されている。また、このあとで狭衣に見られた扇には、未熟な手習がされ、「母もなく乳母もなく、春の新田をうち返しうち返し、返す返すものをこそ思へ」(巻三・38頁)と記されていた。今姫君の養女としての悲哀・悲愁は明確である。「母もなく乳母もなく」は、繰り返される孤児としての心境となる。

源氏の宮は、狭衣から思慕の情を訴えられた時、「さるべき人々の御あたりならで生ひ出でけるをあはれ」に思っていた。養女の境遇に感じ入っていたわけだが、今姫君も環境的な違いがあるものの、同じように感じている。物語は、養女の境遇を二人の対照的な人物によって対象化していることは確かである。今姫君の場合は、洞院の上と母代の性格性情などによって、養女の悲愁が醸成されていると整理しておくことが可能であろう。そして、洞院の上と母代から今姫君が切り離された時、それまでとは違った様相を今姫君は物語末尾で見せることになる。養女になることが問題なのではなく、置かれた環境によって人のあり方や感じ方が変わってしまうということであり、これも物語末尾で示される成長した今姫君のあり方の伏線となっていく。母代などから解放され、夫から大切に扱われることによって、今姫君は成長を遂げているのである(後述)。

なお、研究的には、今姫君の物語を「継子物語」と把握する見解が出されている。例えば、「母親も乳母もない今姫君の心を通わせる相手(女房)のいない孤独と悲しみは、継子物語の女君のようである。とくに、今姫君の後見役をする「母の生縁なる人」の母代の仕打ちには継母のそれであり、そうした継母の行為を見過ごす養母・洞院上はさしずめ女君の実父といった役どころ」とするような理解になるが、今姫君の設定は養女であり、「養女譚」「養女養育譚」としたところである。継子物語的傾向は否定できず、重なる面もあって、継子物語との連関性は考えられようが、やはり「養女譚」などとしての固有の意義を見出したいのである。

三 歌枕「吉野川」と「妹背山」

今姫君の登場は、養女としての悲哀悲愁から語り始められたが、狭衣との交渉が語られるに及んで滑稽譚・烏澁話の要素があらわになってくる。『源氏物語』の近江の君や末摘花の引用でもあるわけだが、すでに注意されているように、巻一の段階で滑稽譚・烏澁話の要素を荷うのは、今姫君ではなく母代になる。ここにずらしの方法が認められるところであり、創意がある。滑稽譚・烏澁話としての面については、すでに詳細な検討がなされているので、ここではあまり言及せず、養女性に視点を置いて、さらに検討していきたい。

狭衣は、中納言昇進の挨拶に洞院の上方に赴くが、そのついでに今姫君のいる西の対に立ち寄っている。そこで、まず女房たちの狂態に接し、さらに母代と贈答歌を交わして初対面の挨拶をしている。

「めづらしき御声こそ。おぼし違へたるかとまで。」

吉野川なにかは渡る妹背山人だのめなる波のながれて
と、げにばばと詠みかくる気配、舌疾に、のど渴きたるを若びや
さしだちて言ひなす。「これぞこの母代なるべき」と聞きたまふ。

「恨むるに浅きぞまさる吉野川深き心は汲みて知らなむ
おぼつかなき心地しはべりつるに、うれしき御気配と思ひたまふ
るに、ものをこそ悪しざまに申しないたまひけれ」とのたまへ
ば、
(巻一・85頁)

母代の奇態さも傍点部で語られているが、この贈答歌で「吉野川」が共有されて詠まれていることに注意したい。この歌枕の使用が、今姫君と狭衣とのかわりを暗示しているのであり、これ以後、今姫君物語を表象する記号となっていく。

大和国の歌枕「吉野川」は、多様な詠み方がされるが、『狭衣物語』とのかわりでは、まず「妹背山」との連関性があることである。「妹背山」の場所については、二、三の説があるが、ここでは「吉野川」

の流域に対峙する形で「妹山」「背山」としてあり、兄妹関係をよそえる歌枕とする理解で充分である。この贈答歌では、周知のように次の歌が背景に据えられて詠まれている。

流れては妹背の山のなかにおつる吉野の川のよしや世中

(古今・恋五・八二八・よみ人知らず)

母代は、この二つの歌枕を使用し、「妹背山の間を流れて、思わせぶりに頼みにさせる波ばかりが立っている吉野川を、どうしてお渡りなさったのでしよう」としている。すなわち、狭衣は今姫君と兄妹なのに、どうして今ごろになって挨拶に訪れたのでしよう、もっと早くに来てくたされてもよかったのにと恨んでいることになる。とりわけ、「妹背山」によって兄妹関係を強調し、「渡る」に来訪の意をひびかせて交誼のなさを恨んだのである。母代は洞院の上と同じく、今姫君の父は堀川関白と信じているであろうから、狭衣とは異母姉弟になる(今姫君が二歳上になるが、以後「兄妹」の語を使用する)。当時としても、正当な妹背であり、兄妹関係なのである。

対する狭衣は、母代の恨みの心を汲みとっているが、「妹背山」を受けずに、「吉野川」だけを受けて返歌している。^(?) 狭衣は、「私をお恨みなさるとは、あなたのお心の浅さが窺えます、吉野川のように深い私の心をお汲み取りいただきたいものです」として切り返している。私の厚意はお分かりになるはずだというわけである。この返歌には次のような歌が踏まえられている。

浅き瀬ぞ波はたつらむ吉野川深き心を君は知らずや

(新撰和歌・四・二二四)

流れ出づる山をし思へば吉野川深き心も絶えむものは

(躬恒集・一)

前者の歌は、後藤康文氏の指摘になるものだが、引歌と認定してもおかしくはないだろう。吉野川の「深き心」に対して、「浅き」が言われているが、狭衣詠と共通しよう。後者は、前者との関連も考えられるが、吉野川の「深き心」である所以を詠んだものであり、歌枕とし

ての吉野川は、「深き」と結びつくのである。

母代は、吉野川から妹背山を導いて狭衣と今姫君の兄妹関係を言い、対する狭衣は吉野川から「深き心」を言っているが、この両者の贈答歌で共有された「吉野川」は、先に指摘したように、以後の今姫君物語を表象する記号となっていく。さらにこの点を確認していきたい。

卷三になって、今姫君入内を思い立った洞院の上は、狭衣に琵琶の指導を依頼することになる。卷一の段階で、狭衣は今姫君を「殿の御子とは言ふべくもあらざりけり」（巻一・87頁）と判断していたが（後述）、その後の様子も知りたく思い、今姫君のもとを訪れる。この段でも卷一と同じく女房たちの狂態に接し、今姫君と応接するが、ここに「吉野川」が使用されている。

はじめおはしそめたりしに、人々答へ遅く聞こえたりとて、母代が腹立ちののしりて、人々をはしたなく言ひしをおほし出づるに、「またいかに言はれむ」とおほすに、身もわななかれて、いとどさらにも言ひ出づべうもなければ、「かの、ばば詠みかけたりし歌をこそは、母上聞きてほめたまひしか」と、まれまれ思ひ出でて、いたうおびれしどけなき声にて、「吉野川なにかは渡る」と一文字もたがへず言ひ出でたまへるを、「げに。人の忘れぬふしや詠み出でたりけむ」と聞きたまふも、これより後、よきも悪しきもあまた見聞くを、さしも御心にも耳にもとどまらぬを、「いつぞやかかることの聞こえし」とおほし出でたるはをかしきに、その折の答へは、「またいかがありけむ」と、忘れにけるぞいと口惜しきや。ほほ笑みたまへる気色は、いひ知らず恥づかしげにて、

吉野川かへすがへすも渡れとや渡るよりまた渡れとや瀬に入り立つもことにとがめ顔ならざるは心やすけれど、ひとわりも心劣りぞしたまひぬる。

母代は局にいて不在なため今姫君は狭衣と応接せざるを得なくなる

が、その作法などを心得ているわけではない。かつて狭衣に母代が応接した際に詠んだ「吉野川なにかは渡る…」の歌を思い出し、それを一字も違えずに口に出している。母代の歌を洞院の上が誉めていたらしので、それを口にすればいいと判断したのである。今姫君は洞院の上を、ここで「母上」と呼称しているところに注意されよう。洞院の上は細かな配慮に乏しいとはいえず、それなりに愛情をそそいでいるのであり、今姫君はそれを感じて「母上」なのであろう。その母上が誉めたのならいい歌なのである。それに、口ずさんだ歌は、兄妹の交誼を求めた歌であった。

今姫君の烏澁な愚昧さが、「吉野川なにかは渡る…」の歌をこの場面に呼びこんだわけだが、狭衣はそれに応答して今姫君を揶揄することになる。同一語の反復と「かへすがへすも」の使用は、周知のように、末摘花への光源氏の返歌の技巧を踏襲している。

唐衣また唐衣からころもかへすがへすも唐衣なる（行幸巻）

『狭衣物語』にはパロディーの世界が演出されていることになるが、こうした場面での「吉野川」の使用は、物語の方法としての作中歌引用にもなろう。また、同語反復される「渡る」は、後に確認するように、源氏の宮の物語とも照応することになる。「渡る」は、母代の贈歌において、川を渡る意に、来訪する意をよそえていた。この卷三の狭衣歌では、それが反復されることによって、男女の仲をよそえるかのようになっている。七夕歌では、天の川を「渡る」ことによって逢瀬を遂げる意が働くことが多いように、「渡る」は逢瀬を持つことの比喩でもあった。狭衣の今姫君を揶揄する歌は、逢瀬を持ってと繰り返しておっしゃるのですかの意が潜められていたのである。だから、詠歌の後、狭衣は今姫君の部屋に「入り立つ」ことになる。逢瀬を遂げようとする行為になるが、もちろんその気があるわけではない。しかし、源氏の宮との逢瀬が適わない苦衷が反映していることは認められよう。二人とは同じく「妹背」の關係になりつつ、今姫君は逢瀬を持って言うとして、逢瀬どころか〈言はで忍ぶ恋〉を強いられている源氏

の宮との関係性も照らし出しているのである。とにかく、「渡る」を誘発させた「吉野川」は、こうして今姫君の烏澁ぶりを表象することになる。だから、この後の物語展開において、繰り返される歌枕となる。今姫君の入内が近くなった時点で、

大将も、かの吉野川の後にあさましく、
(巻三・55頁)

とされて、狭衣は今姫君とのことを想起している。「吉野川」によって烏澁性があらわになったので、「あさましく」なのである。また、物語末尾近くでは、次のような語り方が行なわれている。

なかにも、かの吉野川あまたたびいさめたまひし今姫君の御よすがとなりたまひし宰相中将は、このごろ一の大納言にて、春宮の大夫かけてぞものしたまひける。
(巻四・353頁)

今姫君物語では、作中歌引用の方法によって「吉野川」が烏澁な今姫君を指示する表象的言語として機能するのであり、この歌枕が選択されたのは、逢瀬を暗示する「渡る」が使用できることと、「妹背山」に通じることによって兄妹関係を暗示できるからであった。

こうした次第で、巻三以降、「吉野川」は今姫君の烏澁性や狭衣との兄妹関係を暗示させ表象する歌枕として定着したことになるが、一方では、源氏の宮ともかかわっていた。巻二から巻三にかけての狭衣の粉河・高野詣において、源氏の宮を指示する歌枕としても「吉野川」と「妹背山」が使用されるのである。歌枕の共用によって、この両者における鮮やかな対照性が認められることになる。

吉野川の渡り舟、いとをかしきさまにてあまた候はせければ、乗りたまひて流れ行くに、岩波高く寄せかくれど、水際は水いたたく閉ぢこめて、浅瀬は舟もえ行きやらす。棹さしわぶるを見たまひて、

吉野川浅瀬白波たどりわび渡らぬなかとなりにしものを
おぼしよそふることやあるらむ。

妹背山の近きは、なほ過ぎがたき御心を汲むにや、御舟も出で
行きやらす。

「湧きかへり水の下にむせびつつさもわびさする吉野川かな
上はつれなく」など口ずさみつつ、からうじて漲り渡るに、
(巻二・247～248頁)

ここでの「吉野川」は、激しい恋慕の情や〈言はで忍ぶ恋〉を暗示するものとして機能している。

吉野川水の心は早くともたぎつ音にはたてじとぞ思ふ

(古今・恋三・六五一／古今六帖・五・雑思・人知れぬ・二六六七)

吉野川岩切りとほし行く水の音にはたてじ恋は死ぬとも

(古今・恋一・四九二)

両歌とも「吉野川」の激しい流れに恋慕の情が託され、「音にはたてじ」でそれが〈言はで忍ぶ恋〉になっていることを提示している。これは、まさに狭衣の源氏の宮に寄せる恋情の形であった。狭衣詠では、「吉野川浅瀬白波たどりわび」や「湧きかへり」に激しい流れであることが言われ、「渡らぬなか」「下にむせび」で〈言はで忍ぶ恋〉になっている現状が把握されているのである。

また、「渡らぬなか」は「渡らぬ仲」であり、逢瀬が適わない源氏の宮思慕を象っている。先に触れたように、今姫君に対して狭衣は、「渡れ」とおっしゃるのですかとしていた。今姫君とは「渡る仲」になり、源氏の宮とは「渡らぬ仲」となるのであり、場面を隔てつつ、「吉野川」によって両者は対照化されているのである。

往路の道中では「妹背山」が囁目の景として捉えられ、この名があるゆえに「なほ過ぎがたき御心」であると語られていた。復路では、再び同じように捉えられ、独詠歌になっている。

声をかしようて、「あれ、妹背の山か、さはれ」と歌ひたるさまども
は、おのおの誇りに思ふことなげなるは、なほ「我ばかりもの
思はしきはなきなめり」と、うらやましく思ひわたされたまふ。

行きかへり心まどはす妹背山思ひはなる道を知らばや
避くかたのなかりけるも、契り心憂くながめいりて、

(巻三・12頁)

「心まどはず妹背山」に逢い難い源氏の宮がよそえられているのは確かである。源氏の宮とは従兄妹関係なのに、母の養女となったことで「一つ妹背」として成長していた。兄妹関係・妹背関係は擬制的なのだが、狭衣においては、前稿で確認したように、「妹背」との把握が恋情の発動と抑止の両様に機能していたのであった。こうした次第もここに窺われるのである。

源氏の宮と今姫君は、ともに養女ながら入内が予定され、ともに挫折することでも共通性があり、また、対照的であることはすでに注意されている⁽¹⁰⁾。しかし、あまり注意されてこなかったが、「吉野川」「妹背山」そして「渡る」の使用においても対照的なのであった。両者とも、養女となったことで狭衣と兄妹関係になり、それがこうした歌枕でも仮託されているのである。そして、源氏の宮には兄妹関係でありながら恋情が発動しつつ「渡らぬ仲」となり、今姫君にはその鳥潛性ゆえに恋情が発動する余地はないものの「渡る仲」になるというように、対照的なのである。両者に同じ歌枕が使用されることで、巧みに対照化させる方法とみなすことができる。

四 今姫君の素姓と「あきれたる顔」

「吉野川」によって今姫君の鳥潛ぶりを表現するとともに、「妹背山」で狭衣との兄妹関係を強調する働きをしていたことになるが、堀川関白と狭衣側では、今姫君の素姓は疑問視されていた。母代側で「妹背」の関係が言われつつ、一方では疑問視され、その間で今姫君は宙吊りにされているのである。もう一度初登場の時点にもどりたい。

そもそも狭衣と堀川の上との会話において、噂という形で登場した時点で今姫君の素姓は怪しかった。堀川の上は、今姫君が洞院の上に迎えられたことを狭衣に語った後、さらに言葉を継いで次のように男兄弟のことにも触れていた。

男子のいとあやしきもあなれど、宮の少将に似たりとて、かの宮の子にしたまふとなむ聞きし。そもさるべきやうやありけむ。
(巻一・73頁)

この「宮」を中務の宮とする説にしたがっていくが、今姫君の兄弟は、この中務の宮の子息に似ているというところで、中務の宮の養子になっているとされている。中務の宮は、子息の子、すなわち孫だと思つて養子にしたことになる。男兄弟の父が宮の少将なら、今姫君の父は堀川関白でないこともあり得る。今姫君は、登場当初から素姓が怪しいのである。

今姫君の顔は、狭衣によってすぐさま確認されている。母代と「吉野川」の贈答歌を交わして辞去する際、風のいたづらで御簾が吹き上げられ、几帳も倒れたことよって、室内にいた今姫君を見ることができたからである。

のどのどと見入れたまへば、香染に鈍色の単衣、紅の袴の黄ばみたるを着て昼寝したる、人々の騒ぐにおどろきて、あうなく起きあがりたるに、いとよく見あはせて、あさましきにや、とみにうち背きなどもせず、あきれたる気配、顔はいとをかしげなり。「心なのさまや」とは見えながら、「女房の有様どもよりは、こよなく見つべかりけり」と思ひましたまひつ。「かの兄のかこちけるゆゑにや、少将にぞいとよく似たりける。殿の御子とは言ふべくもあらざりけり」と見るに、ただならずや思ひたまふらむ、「様のものと、あやしの心ばへや」と、我ながら心づきなし。
(巻一・86～87頁)

顔つきは、人物の血筋をあらわす最も重要なしるしであった。女二の宮所生の若宮の父が、狭衣であることを、その顔つきから判断されていた。ここでは、今姫君の顔は、中務の宮の少将と似ていると判断されている。似ているとの判断は、即座に「殿の御子とは言ふべくもあらざりけり」との結論を導いている。この時点で、今姫君の素姓は、狭衣において明白になったことになる。血筋的には、異母兄妹と

しての妹背の関係ではなかったのである。しかし、すでに洞院の上の養女となっているので、擬制的な妹背になることは確かであるが。

狭衣を中心におけば、今姫君と源氏の宮は、ともに結婚可能な間柄でありつつ、妹背の関係になることで、すなわち養女ということでも相似するのである。だから、源氏の宮に恋情が発動したように、本来の妹背でないと思われ、狭衣は、「ただならず」心が動いている。「様

のもの、あやしの心ばへや、すなわち、源氏の宮と同じ境遇だと感じ、心が動いたのである。しかし、「我ながら心づきなし」との自省が働き、恋情の発動は未然に防止されている。

恋情は未然に防止されたとはいえ、今姫君を「あきれたる気配、顔はいとをかしげなり」とした印象は、狭衣において継続的に想起されていく。翌日、堀川関白に報告にあがった際、

あさましとあきれたりし顔は、さすがに憎むへうもあらざりつれば、
(巻一・88頁)

と思いつ返している。また、巻三になって琵琶を教えに出掛けた際は、
にくからざりし風のまよひの後も、え気色見ぬぞかし。
(巻三・31頁)

と回想している。また、この時は再び今姫君の姿を見ることになるが、
あきれたる顔、さるかたにうつくしげなる様ぞしたまへる。
(巻三・32頁)

とされている。さらに、入内騒動が宰相中將の密通で落着すると(後述)、
にくからざりし顔つきは、さすがにあはれにもおぼされけり。
(巻三・62頁)

と狭衣に思われている。今姫君の顔は美しげで、美人になるわけだが、その印象は、擬制的でしかない妹背関係の確認にもなっていることになる。

五 洞院の上と母代と今姫君

これまで部分的に触れてきたように、巻三になっての今姫君の再登場は、入内騒動として展開している。ここではすでに洞院の上によって入内が思いつかれていた。以下、巻三以降を焦点化していきたい。

まこと、かの大殿の御方にかしづかれたまふ今姫君は、二十にもやや余りたまふままに、いとをかしげにねびまさりたまふを、母上いとはなやかにもの好みしたまふ御本性にて、齋宮の御有様を見たてまつりたまふもうらやましう、行末の心細さも年月に添へておぼし知らるれば、「この君をかうまで取り寄せつとならば、同じくは人なみなみにもてなして、かくさまさまにもてかしづきたまふ御方々のくさはひにもせむかし」など、せちに人に劣らじの御心掟にて、内裏参りのことなどおぼしよりにけり。
(巻三・25頁)

洞院の上が今姫君の入内を思いついた理由は、養女に迎えた理由とそれほど径庭はない。洞院の上の「いとほなやかにもの好みしたまふ御本性」「人に劣らじの御心掟」の所在も巻一と同じであり、「さまさまにもてかしづきたまふ御方々」を羨望することも変わってはいない。それどころか、もっと世話にいそしみたくなっている。ここにきて、洞院の上は「行末の心細さ」を繰り返し訴えるようになっていくが、後世を弔ってもらうためにも、今姫君の将来を安定させたくなっている。そこで思いついたのが入内であった。縁組の当初には入内のことはなかったのである。堀川の上には齋院があり、坊門の上には中宮がいる。自分に后妃がいてもおかしくないと思うようになっていく。

洞院の上がこの決意を固めて堀川関白に相談しても、入内を危ぶまれるだけである。堀川関白は、「まことの御子」(巻三・25頁)とは判断しておらず、その様子を時々見ると宮仕などできそうにもないと思う

からである。そこで洞院の上は、今は女院となつてゐる姉に相談することになる。相談する経緯のなかで「ゆかり」の語が集中的に使用されていることに注意されるが、この点は前稿を参照されたい。洞院の上はまた、今姫君にそれなりの教養をつけさせるべく、狭衣に琵琶の教習も依頼している。洞院の上は、その本性ゆえに、にわかには活気づいて動きだしたのであり、入内するのが今姫君であることと相俟つて、異常な事態が想定されるようになる。洞院の上の動き自体も、問題なのである。

洞院の上とともに、母代の狂態ぶりもますます明白となり、当の今姫君も、巻三になつて、烏滸ぶりが狭衣の視線によつて捉えられるようになる。その一端が「吉野川」の一件であつた。巻一の段階では、今姫君の烏滸ぶりをあらわには語らなかつたが、ここにきて語られるようになつてゐる。烏滸の次第をさらに具体的に検証することは省略に従いたいが、狭衣による、この三者の本性を反芻する次第を引用しておきたい。

御後見のいとさかしく、かたはらいたきさましたるもてなしに、よからずあやしき若き者どもの集まりて、人にうちはやり、ありつかぬなめり。みづからの御有様も、ただおびれて、うち惑ひたまへるにこそはなど、世の常に思ひつるを、いとことのほかにはしけるかな。また、これを内裏に参らせむなどまでおぼし寄りつらむ上の御心ぞ、いまま少しあさましきや。年ごろも、いかにぞやある御心とは見つれど、あまりかど過ぎて、何事ももて出でて、好ましきところなどはすすみたまへると見つるは、そらごとこそありけれ。かうまで心おくれ、思ひやりなきわざし出でたまふべしとは思はざりける我が心さへ口惜しきまでぞ思ひ知られたまひぬる。
(巻三・36頁)

「御後見(母代)」「みづからの御有様(今姫君)」「上の御心(洞院の上)」という具合に、狭衣は三者の本性を見抜いて、今姫君入内の危険性を危惧している。今姫君に関しては、養女となつたゆえに、「ただ

おびれて、うち惑ひたまへる」と思つてゐたが、今姫君自身も常軌を逸してゐるとして、その烏滸ぶりを見抜いてゐる。

今姫君の烏滸ぶりは、入内後の騒動を予見させるがゆえに、危険なのである。怪しい素姓ながら養女として堀川関白家に入り込んだ今姫君が、母代の狂態ぶりと洞院の上の愚昧な判断とに呼応して、今や波乱の原因となりつつあるのであり、秩序の紊乱者の役を担おうとしてゐる。だから、堀川関白家は、家門の恥辱をさらしかねない事態に陥つてゐる。洞院の上の入内画策は、今姫君が紊乱者になるがゆえに、危険性を孕んだものであつたのである。

六 入内騒動の意味

今姫君の入内は、その直前に洞院の上の兄弟となる宰相中将が密通する騒動におよび、破綻することになる。この騒動自体も具体的に検討することは省略するが、その代わりにこの意味づけについての先行論文について、ここでは検討しておきたい。検討したい先行論文の要点は、次のようなものになる。

・今姫君事件を契機に、一条院・後一条院の後ろ盾である太政大臣家の凋落ははかりとれるだろう。この家と家との境上に今姫君はおり、勝利者たる堀川殿を寿ぐのであつた。⁽¹²⁾
・今姫君が一条院系の皇統を支えとする太政大臣の娘洞院の上方に抱え込まれてゐることで、源氏の宮の故先帝系の堀川の上とが対峙してゐることは明らかで、狭衣をともなつての堀川大殿(一条院の弟)の政権と王権との回復過程で、一条院の皇統と太政大臣家とが挫折し脱落していく象徴的事件として狂言じみた今姫君入内事件が巻三に展開する。⁽¹³⁾

後者の論は、前者の論を受けており、ともに洞院の上と堀川の上の対立と、太政大臣家の凋落脱落を今姫君入内騒動に見出ししている。この妥当性を検討していきたい。

まず、太政大臣家が凋落脱したとする見解になるが、これはあやしいだろう。もしそうであるならば、今姫君と契った宰相中将にお咎めがあってもしかるべきであろうが、七年後の物語末尾では、「一の大納言」に昇進している。次期内大臣候補でもあるのであり、太政大臣家が政権から脱落していたとしたら、あり得ない事態であろう。太政大臣家は、今姫君入内騒動で何の損傷もきたしていないのである。後一条帝も今姫君の「ねぢけがましき生ひ出で」（巻三・27頁）を難点と感じていたので、入内中止の事態になっても「内裏にはさらに御心もゆかざりしことなれば、なにも御耳にもとまらせたまはざりけり」（巻三・62頁）とされている。お咎めは一切なかったのである。

そもそも太政大臣は、所生の娘二人を理想的に縁組させている。姉が「一条院後の宮」であり、後一条帝を設けたので、即位してから太政大臣は外祖父である。妹は、洞院の上であり、堀川関白と結ばれて正妻の一人である。洞院の上は、姉の入内後に結婚し、早い時点で堀川関白邸に移ったと想定されるが、夫妻同居の形となったこの縁組によって、父の太政大臣が堀川関白を支える立場になったことを意味すると思われる。『狭衣物語』では、太政大臣と関白の大臣がいるという仕組になっているが、堀川関白の優位のもと、太政大臣はそのもとで政権の一端を支えているのだと思われる。太政大臣家は、堀川関白の対抗勢力ではなく、こうした形で健在なのである。

この太政大臣は、今姫君入内を前にしてその準備にいそしんでいた。

太政大臣、腰痛きまで出で入りいそぎたまふを、殿の内の人も、「幸ひおはしける君かな。今こそその人の御女なども言はれたまへ、いともものげなき母の局より生ひ立ちしさま」など、めでたきにつけても、世の人のもの言ひは聞きにくきものにて、このごろのあつかひぐさにこそ言ひのしりけれ。（巻三・54頁）

太政大臣は、「腰痛きまで」とされるので高齢なのである。それにもかかわらず、娘の養女が入内するというところで洞院の上のもとに出

入りしている。新全集では、「祖父殿の、沙汰も知らず（今姫君の評判も知らず）」（新全集巻三・66頁）とされているが、祖父だからこそ孫のためにいそしむのであり、それは堀川関白家への協力なのである。

この太政大臣のことを語る本文は、奇しくも今姫君入内騒動の意味を表現している。もし、入内が可能となったならば、今姫君は「その人の御女」、すなわち洞院の上の娘として名声を手にする事態もあり得たのである。養女が養女であるがゆえに擱めたかも知れない幸運の所在を、「殿の内の人」も世間の人も認めざるを得なかったことにな。だから「このごろのあつかひぐさ」になったのである。しかし、それは母の兄弟によって挫折させられたのであった。

入内に対して、堀川関白は口入れしなかったが、入内は一般的にいえば堀川関白家の慶事になることは動かない。それは、堀川の上とでも同じであろう。洞院の上と堀川の上とを対立させて考えるようだが、それぞれの家を背負った后たちの、後宮における対立図式のようなものを当てはめるのは妥当性に欠けよう。『源氏物語』「絵合」巻の斎宮女御と弘徽殿女御の対立図式を当てはめることはできないのである。妻（たち）は、夫の立場を盛りたてる役目があるのであり、妻の立場にあって、夫ではなく実家のことを優先することは想定しがたい。もしその事態がおきたとしたら、離婚となろう。洞院の上と堀川の上とを対立させて、それぞれの背景となる血筋や家まで対立させる想定は、後宮ならいざ知らず、源家や貴族の家においては成り立たないと思われる。

堀川の上は「故先帝」の妹だが、すでに「ただ人」であり、また「故先帝」の血筋は源氏の宮以外になく、斎院になったことで途絶している。堀川の上を「故先帝」系と捉えても、この時点では何の意味ももたらさないとされる。

また、洞院の上を、一条院系を支える太政大臣家の一員と位置づけることも、すでに堀川関白の妻となった時点で意味をなさない。もし、一条院系が挫折したとするならば、それは子の後一条院に男子が

なかったことに求めるべきであり、それは物語が語ることであった。堀川の上と洞院の上を対立的に捉えるのは無効なのだと思われる。

入内騒動の意味は、養女として闖入し、素乱者となりかねない今姫君による堀川関白家の混乱恥辱を未然に回避できたことに求めるべきだと思われる。危機を脱し得たことによって、ひとまず堀川関白家は安泰なのであった。騒動が落着いてから、今姫君の登場は物語末尾までない。

七 今姫君の成長

巻四後半の物語は、終結に向けてそれまでの物語展開を收拾していくが、その一環として今姫君が再々登場している。女二の宮所生の若宮が理想的に成長して兵部卿宮となり、婿に望む人たちが狭衣帝に意向を打診してくるようになるが、その一人として今姫君夫妻がいた。

なかにも、かの吉野川あまたたびいさめたまひし今姫君の御よすがとなりたまひし宰相中将は、このごろ一の大納言にて、春宮の大夫かけてぞものしたまひける。西国の受領とて、母代にいり揉まれたまひしかど、やがてそのあたりをとり放ちて、また類なくあはれなる心ざしに思ひかしづきこえたまひしかば、かたくなかりし御心もおのづからもてかくされて、あまた年も過ぎにければ、いとをかしげなる御子ども多かるなかに、大君すぐれたまへるを、大納言は、「いかにまれ、春宮に奉りて、かならず后に据ゑてむ」とおぼしのためふを、母君は、「昔、本意違ひて、帝をもえ見たてまつらず、うとうとしくなりし代はりに、この宮(兵部卿宮)をだにけ近くてこそあらせたまつらめ」と、からうじて御心強うのたまへば、「まれまれはかばかしくおぼし寄らむことを違へきこえじ」と、大納言も思ひなりたまへるにや、一品の宮の御方より伝へ奏せさせたまひける。(巻四・333〜354)

入内騒動の顛末もここで明らかにされており、かつての宰相中将は、母代から今姫君を解放し、自邸に引きとっていたとされる。養女の時代を経て、今姫君は妻となっていたのである。大納言に昇進している夫は、優しく愛情をこめて妻の世話をしたため、烏滸で愚鈍とも見えた心も目立たぬようになっていくという。こうした語りで、今姫君を擡り上げて、その成長ぶりを示していることになる。また、養女としての悲哀悲愁は、母代の後見が悪かったために生じたものであったとする理解も行なわれていることになる。養女の境遇が一概に悪いわけではなく、置かれた環境や人間関係のありようによって悲哀もたらされるのだとする理解になろう。優しい夫によって、悲哀悲愁から掬われている現在の今姫君は、子沢山であるとされて、その幸いぶりも提示されている。

娘の大君処遇に関して、今姫君は、「昔、本意違ひて、帝をもえ見たてまつらず、うとうとしくなりし代はりに」として、兵部卿宮に縁付かせたいと念じている。ここは、新全集などではなく、集成本の解釈のように、「帝」は、かつての後一条帝ではなく、現在の狭衣帝になろう。したがって、ここでいう「本意」とは、入内することではなく、「吉野川」の交誼を求めようとしたことを指している。だから「かの吉野川あまたたびいさめたまひし今姫君」と提示されるのである。今姫君自身が入内を「本意」とした経緯はなく、それは洞院の上のものであった。妹背の交誼を狭衣と持つことができなかったので、せめてその一の宮の兵部卿宮を婿に望もうとするのである。こうした判断にも、今姫君の成長ぶりが表現されるのである。

今姫君の申し出を聞いた狭衣帝は、年月の経過をしみじみ思うことになるが、今姫君夫妻に対する次のような判断で締め括られている。

「心の限りもてかしづかるらむ姫君の有様などもいかならむ。大納言は、おほかたの掟ばかりこそあらめ。うちうちのこと、母君の教へのままにぞあらむかし。それを見苦しと思はむには、大納言までありなむや。何事もあらあらしく心をやりて、うたはやり

たる人がらなればぞかし」とおぼしやらるるだに、いとうしろめたくわりなきに、「琵琶の音、弾き伝へてやあらむ」と思ひやらせたまふは、ひとり笑みせられさせたまひて、かひがひしくぞ答へさせたまはざりける。

(巻四・354頁)

狭衣帝はかつて今姫君を垣間見て、その本性的な烏滸ぶりをしっかりと見抜いていた。それがあるから、この夫妻は似た者同士であり、だから、そのために今姫君の欠点があらわにならなかつたのだろうと判断している。だから、兵部卿宮を、評判とは言え、大君の婿とすることにためらわれるのである。

今姫君の本性的な烏滸性は、払拭しようがない。しかし、大納言が夫であるゆえに、目立つことなくすんでいとされる。巻一や巻三で語られたその烏滸ぶりは、置かれた環境が悪かつたから、すなわち、母代が悪かつたからということになる。今姫君においても、養女の悲哀悲愁のままに語り終えることはないのである。物語における養女へのまなざしを思うべきであろう。

注

- (1) 拙稿「源氏の宮の養女性をめぐる」(『古代文学研究 第二次』11、二〇〇二年一〇月)、「狭衣と若宮をめぐる」(『預かり』)と若宮即位への道筋」(『大妻国文』33、二〇〇二年三月)、「狭衣物語」の若宮をめぐる」(『源氏物語』引用からの創造」(『論叢狭衣物語』3 引用と想像力』新典社、二〇〇二年五月)、「飛鳥井の姫君の位置づけ」(『大妻国文』31、二〇〇〇年三月)、「狭衣物語」の嵯峨院とその皇女たち—養女論の一環として—」(『大妻国文』34、二〇〇三年三月)。
- (2) 横尾三雄氏「狭衣物語」の一試論—今姫君物語考—」(『平安朝文学研究』2・2、一九六六年五月)。
- (3) 森下純昭氏「古本住吉物語と狭衣物語—飛鳥井の物語との関係—」(『語文研究』35、一九七三年八月)は、「飛鳥井と今姫君は当初からい」とこの関係で人物設定されている」とされ、「今姫君は飛鳥井と関連す

る形でしか顔を出さず」ともされているが、源氏の宮との関連も見たいと思う。

- (4) 片岡利博氏「一品宮の物語について」(『物語文学の本文と構造』和泉書院、一九九七年四月)は、「巻一の「伯母の尼君」と巻三以後の常盤尼とは別人物と考えるべきであろう」とされている。
- (5) 斎木泰孝氏「狭衣物語の諸本と女房の人物像—読者による物語の改変—」(『物語文学の方法と注釈』和泉書院、一九九六年六月)。
- (6) 伊藤博氏「狭衣物語」の今姫君放」(『大妻国文』26、一九九五年三月)。
- (7) 新全集では「また、ある本に、／＼知らせばや妹背の山の中に落つる吉野の川の深き心を」を載せる。
- (8) 後藤康文氏「狭衣物語」作中歌の背景(一)」(『文献探究』22、一九八八年九月)。
- (9) 拙稿「言はで忍ぶ恋」の狭衣—源氏宮の物語—」(『狭衣の恋』翰林書房、一九九九年一月)。
- (10) 片岡利博氏(注(4)と同じ)、井上眞弓氏「狭衣物語」の構造試論—親子の物語より—」(『日本文学』一九八二年一〇月)、堀口悟氏「狭衣物語」の今姫君と源氏宮—后がねとしての社会的地位—」(『日本文学論叢』22、一九九七年三月)など。
- (11) 拙稿「狭衣物語の「ゆかり」の語誌」(『学芸国語国文学』32、二〇〇〇年三月)。
- (12) 井上眞弓氏(注(10)と同じ)。
- (13) 久下裕利氏「狭衣物語」の人物呼称について」(『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九三年一月)。